

# 教 仏 庵 草

第190号  
(発行日)

2006年4月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mailaddress--kousien2720kimyou

@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日  
午後3時より。

○ 真宗共学会――毎月第一と  
第三木曜日午後7時より。

\* 8月22日同朋の会および8  
月12日念仏座談会は休みます

## 真宗問答(二十一) 第十七願その二

C 「先月は十七願は〈諸仏称名の願〉とか〈諸仏称揚の願〉とか名付けられる、その意味のお話でしたが、宗祖は十七願をまた〈往相回向の願〉ともいわれ

比叡山で修行されたのは、そういう自分の修行の力によって浄土に往生しようという道を歩まれました。しかし聖人はそういう自力の道は及びがたい、我が力およばずとなつて、その道にいきづまられたのです」

D 「まず、往相とは浄土に生まれ往くすがた(相)ということ

C 「自分の修行によって浄土に生まれようとす道に聖人はいきづまつてしまわれたのです。それで聖人はどうなさつたのですか」

れを回向してくださる、これを往相回向と申します」

D 「自らの修行による浄土往生の道が破綻して、比叡山を下り、

C 「回向とは」

法然聖人の元にかかれ、法然聖人から本願他力の教をお聞きになられ、阿弥陀様が全面的に私たちの往生浄土を引き受けてくださる、その大悲のお心にであ

D 「めぐらしさしむけることです。いわゆる与えるということ

C 「そうすると聖人が私たちに教えてくださる道は、阿弥陀様にまるまる助けられて浄土に生まれる道なのですね。それを往相回向といわれるのですね」

C 「浄土に生まれるのは厳しい修行をすることによって生まれるのではないのですか」

D 「ええそうです。阿弥陀様が、

D 「浄土に生まれるために厳しい修行をし、己のなした修行の功德によって、浄土に生まれることができるという、そういう浄土の教もあります。聖人はお若い時、天台宗の修行僧として

浄土に生まれ往く道であり法であり功德である、その全体を私たちに与えてくださるのです」

てますから、何ともなくなつていますが、実際は驚くべきことです」

C 「世界には仏の世界に至ろうとして修行する仏教徒たちがいますが、同じように神の国や天国に生まれようとして、真剣に祈つたり、戒律を守つたり、布施をしたりなどして、さまざまな宗教行をしているキリスト教徒やイスラム教徒やヒンズー教徒たちがいますね」

D 「そうなんです。世界中の多くの人がたが(いかにして神の国や仏の国に生まれるか)という問題に関わつてい

\*  
C 「それにしても現代の日本人はこういう問題意識が乏しいですね」

D 「現代の日本人は純なる宗教心が閉塞し、宗教的に大変貧しくなつています」

C 「どうしてですか」

D 「いろんな理由があると思いますが、概して今日の日本人の人生観は、この世だけがすべてであり、この人生をいかに快適に過ごすかという関心ばかりになりなりました。この人生には(心して求めるべきまことがある)ということが無くなりました。また道徳といつても、お互いが快適な暮らしをすることに對して(他人に迷惑をかけない)という程度の道徳です。ですから道徳そのものの意義に尊厳さがなくなつています」

C 「それはいわゆるニヒリズムですね」

D 「ええニヒリズムがだんだん濃厚になつてきている社会が日本社会の現状です。ですから他人に迷惑かけない範囲で大いに人生を楽しもうという快樂原理が中心となり、人生は厳肅なものだという感覚はなくなりました。そういう社会ですから、人生に尊い意味などは感じられなくなり、またそれを見いだせない状態です。そして快樂原理は自分の行動をコントロールする内的な権威がないので、たかがゆるみがちとなり、犯罪が増えていきます。また一方で、人生が快適ではなくて苦痛が続くような人は、(こんな苦しい目までしてなぜ生きねばならないのか)、それが分からなくなつて人生に絶望し、そのために自殺が増えてきたのだと思います。快樂原理で生きようとする苦しみ耐えてまで生きようとする力を失つてしま

\*  
C 「十七願は往相回向の願であつて、浄土に生まれる往相(法)を私どもに与えてやりたいとの如来法藏様の願だということですが、それと南無阿弥陀仏の名号とはどういう関係があるのですか」

D 「阿弥陀様の側から言うと、阿弥陀仏の名号を私どもに与えることがそのまま私どもを浄土に生まれしめることになるので

す。すなわち南無阿弥陀仏の名号を衆生に与えることよって、浄土に生まれる（往相）という恵みを衆生に成就なさるのです」

C「そのところがまだよく分かりません」  
D「ここは大事なところですよ。そのことをもう少し根本の処から申しますと、阿弥陀様と私たちはもともと不可分・不可同の関係にあると私は受け取っています。これは聖人の『尊号真像銘文』に

この如来は光明なり。尽十方というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり

とあり、阿弥陀仏は十方世界にことごとく充ち満ちておられるとの仰せです。ですから阿弥陀仏のいままぬところはどこにもなく、阿弥陀仏は私たちと離れておられず、私たちとともにまします。いわば阿弥陀仏と衆生は不可分です。しかも私たちは仏ではなくて煩惱具足の凡夫ですから、当然阿弥陀仏と私は不可同でして、同じではないのです」

C「阿弥陀仏と衆生（私）は離しがたく一つであるけれども、私は阿弥陀仏ではないのですね」  
D「ええそうなのです。私たちは阿弥陀仏と離れない、阿弥陀仏と一つなのですが、その事を見失ない、そのことに迷ってバラバラな一個の存在としての

（私）になっています。ですから、阿弥陀仏と私は不可分であるという根本事実にもかかわらず、それを知らずに迷い、（私）という個体に妄執しながら生きています」

C「阿弥陀仏と不可分の関係を知らず、自分は自分であって他ではないと切り離し、それゆえに苦しみと闇の領域を彷徨し続けているのが私なのですね」

D「そうなのです。そういう私たちに阿弥陀様がであいをもとめ、私たちをおさめとって、阿弥陀仏と一つにしたもう、いわば仏にしたもうのです」

C「いつどこで仏にしてくださいのですか」  
D「阿弥陀仏の浄土に生まれることよって仏にしたもうのです。ですから阿弥陀仏の浄土に生まれることと阿弥陀仏と一つになることとは一つのことなのだとお聞きしています」

\*  
C「どのようにして阿弥陀仏は私にであいたもうのですか」  
D「阿弥陀仏は南無阿弥陀仏の名号となって私にであいたもうのです。すなわち名号となって喚びかけてくださる、その喚び声が私どものお念仏となつてくださるのです。阿弥陀仏が（ここに

にいるよ、ついているよ」と喚びかけたもう、そのみ言葉が南無阿弥陀仏のお念仏です」

C「私の口に出てくださるお念仏は、阿弥陀仏が（私はあなた

とともにいて離さない」というみ言葉なのですね」

D「ええそうなのです。阿弥陀仏と私は、初めは離れていて、それから私に結びついてくるというのではなくて、先ほども申しましたが、阿弥陀仏と私はもともと離れていないのですが、私の妄分別の意識が私と阿弥陀仏を切り離していたのです。それが今、阿弥陀仏は、南無阿弥陀仏でもって阿弥陀仏と私の不可分の関係を回復してくださいのです」

\*  
C「私を撰めとって捨てないことよすが、それと浄土に生まれるというのはどういう関係があるのですか」

D「阿弥陀仏は私を撰取し引き受けて、私を浄土に生まれさせてくださるのです。そのみ言葉がやはり南無阿弥陀仏のお心で、（かならずタスケル。浄土に生まれさせる）の誓願なのです。ですから南無阿弥陀仏は（ここに

にいるぞ）だけではなくて（つれていくぞ、生まれさせるぞ）の大悲の仰せなのです」

C「阿弥陀仏は（お前を浄土に生まれさせる、助けるぞ）」と仰せくださるのですね」

D「ええそうなのです。こうした衆生救済の全体を阿弥陀仏の本願力と申します。よくそれを如来の願船とか弘誓の船というように船で聖人はたとえられます。御和讃に

小慈小悲もなき身に  
有情利益はおもうまじ  
如来の願船いまさずは  
苦海をいかでかわたるべき  
生死の苦海ほとりなし  
ひさしくしずめるわれらをば  
弥陀弘誓のふねのみぞ  
のせてかならずわたしける  
とあります。阿弥陀仏は願船となつて私のところに来て私に喚びかけ、（乗れよ、必ず浄土の岸にわたすぞ。助けるぞ）」と喚びかけてくださるのです」

C「その喚びかけが南無阿弥陀仏の名号なのですね」  
D「ええそうです。南無阿弥陀仏は単なる言葉ではなくて、阿弥陀仏の本願力そのものが南無阿弥陀仏となりたもうのです」

C「南無阿弥陀仏は単に私たちへの喚びかける言葉ではなくて阿弥陀様そのものなのですね」

\*  
D「ええそうなのです。その本願力が私たちに南無阿弥陀仏となつて現れてくださることを（回向）」というのです。それで曾我量深先生は（回向とは表現だ）」ともいわれました」

C「本願力が回向されるといふのは、阿弥陀仏が我々を救おうとされる、そのお働きが私たちの上に表現される、それが回向ということですね」

D「そうなんです。回向とはそういう如来ご自身の自己表現であり、それが南無阿弥陀仏のみ

言葉です。南無阿弥陀仏は阿弥陀様の自己表現であり、阿弥陀仏そのものなのです。阿弥陀仏（本願力）は南無阿弥陀仏となつて大悲の願心を私たちに知らせてくださいなのです。南無阿弥陀仏を聞くことは阿弥陀仏の大悲の心を聞くことであり、阿弥陀仏そのものと接していることですよ」

C「阿弥陀仏のお心を聞くことがなぜ浄土に往生することになるのですか」  
D「南無阿弥陀仏の仰せである（お前を助ける、引き受ける）」とまで仰せくださる仏心を感じ受けるところに、不思議にも自覚的に阿弥陀仏と離れない身にならしていただくのです」

C「もともと阿弥陀仏に離れていないけど、その関係が活性化していなかったのですね。そんな私が阿弥陀仏の（汝を助けに来た、タスケルぞ）」という仰せを聞き受けた時、阿弥陀仏と私の離れない関係が活性化するのですね」

D「そういえると存じます。そして私が浄土に生まれた時は阿弥陀仏と私は離れないどころか一つにしていたのです。それを成仏というのです。それで十七願は、往生浄土のすべてを實現してくださる阿弥陀仏の本願力を南無阿弥陀仏の名号として衆生に与えようという（往相回向の願）なのです」（了）

# 歎異抄

## 後序第十講

まことに、われもひともそらごとをのみもうしあいそうろうなかに、ひとついたましきことのそうろうなり。そのゆえは、念仏もうすについて、信心のおもむきをも、たがいに問答し、ひとにもいいきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論をたたかいかたんがために、まったくおおせにてなきことを、おおせとのみもうすこと、あさましく、なげき存じそうろうなり。このむねを、よくよくおもいつき、こころえらるべきことにそうろうなり。

(歎異抄後序より)

(現代語訳) 本當に、わたしも他の人もみなむなしきことばかりをいいあっておりますが、とりわけ心の痛むことが一つあります。それは、念仏することについて、お互いに信心のあり方を論じあい、また他の人に説き聞かせるとき、相手にものをいわせず、議論をやめさせるために、親鸞聖人がまったく仰せになつていないことまで聖人の仰せであるといひ張ることです。まことに情けなく、やりきれない思いです。これまで述べてきたことを十分にわきまえ、心得ていただきたいことと思ひます。

\*

聖人亡き後、聖人から直接間接に真宗念仏の法縁にあった専修念仏のひとびとのなかで、お念仏の信心についていろいろな言ひ分が現れてきたのでありましよう。当時、念仏の信心に関して論議問答が盛んになされ、時には言い争うこともあったのでしよう。こうした中で、親鸞聖人のお伝えくださるご信心の趣と異なる

った言ひ分が現れ、これを嘆いた唯円房様が聖人から直接お聞きになった信心の思召しを存命中に書に表し、それによって異議を正そうとされ、またこうした異議にまどわされないようにと、お書きになったのが『歎異抄』でありましよう。

こういう異義は親鸞聖人の存命中にもありました。法然聖人亡き後、法然聖人の教えられた(選択本願念仏)の教えに對して、さまざま異義が現れ、多くの人が法然聖人の教えてくださった浄土の教えにまどうたのです。それで親鸞聖人は多くの書物をしたためられて、法然聖人の教えられた浄土宗の真の底(浄土真宗)をあきらかにされ、そのことによつて正しいご法義に戻るようにとご苦労されたのが聖人の晩年でした。

〔歴史は繰り返す〕で、親鸞聖人亡き後に、聖人から共に教えを承った人たちの中において、聖人の思召しでない異なる教義が現れ、それによつて惑わされる人たちも出たのでありましよう。そういう状況下、聖人に親しくご指導をたまわつた唯円房様が聖人の教を誤りなく後世に伝えようと書かれたのが『歎異抄』でありました。

\*

お念仏申すについて、その念仏の信心についてお互いに問答をしたり、論議したりする、そういう時に、「ひとついたましきこと」があると唯円房は仰せられます。それは論議が論争になつて、相手を言い負かそうとして「まったく(聖人の)おおせにてなきことを、(聖人の)おおせとのみもうす」ことがあり、それがいかにもなげかわしいことであると唯円房は悲痛されています。

自分の主張を正当化するために、「親

鸞聖人から私はこのように聞きました」とか、「親鸞聖人はこう仰せられたと先達から聞いた」と、聖人の思召しではないことをあたかもそれが「聖人の仰せ」であるかのように申される。「親鸞聖人の仰せであるから私の言うことに間違いはない」と主張され、それによつて相手を屈服させようとする、このようなことがあつたのでありましよう。

彼らの言う「親鸞聖人の仰せ」が「親鸞聖人の仰せ」とはいえない誤つた内容であるとき、唯円房は放置しておくことのできなかつたのだと思ひます。

\*

どうしてこういうことが起こるのでしようか。それは一。論争に勝ちたいために、聖人の仰せではないのに、「聖人の仰せである」といつわり、それによつて相手を押さえ込もうとする。

二。親鸞聖人の御法話を聞いていても、聞き違いをしていることが分らず、「聖人はこう話された」と自己流に受けとつて、それを主張する。

あるいは聖人のご法話を聞いて、そのときのお話の中の些細な部分や第二義的な部分をあたかも聖人の主たる意趣のようと思つてしまい、それを主張する。等々からではないでしょうか。

一は、たとえば聖人のお子様である善鸞様が、聖人から関東に派遣されて布教された時、「私は父聖人から、私だけに夜中に教えてもらった法門がある」と偽り、聖人の教に背くような話をされ、それによつて多くの聖人のご門弟たちが信仰上の混乱に陥つたと伝えられています。

二は、聖人が「私のような罪惡深重の

悪人をお助けくださる本願のかたじけなさよ」というお話を聞いて、それを聞き誤つて「どれほど惡をしてもかまわない、仏様が許してくださいさるのだ」などと自己の惡を肯定する理由づけにする。

あるいは、「ご信心をいただくということは、古い自分に死んで新しく生まれ変わったようなものだ」というようなお話を何かの縁で聖人がおそばの人にされたとすると、それを聞いた人の中に「聖人は死んでから浄土に生まれるのではなく、信心をいただいたらこの身のままですでに浄土に往生したのだといわれた」と、あたかもこの世でさとりを開いて仏になるかのごとくに受け取つてしまふ。

\*

いろいろな異義が聖人滅後に起こつてきたのだと思ひます。こういう異義はもとをただせばその人の信心が聖人と異なるからです。聖人はそういうような異義や邪義が出てくることを生前中に予測されていたと思ひます。そこで晩年は聖人自ら筆を執つて真宗念仏の意趣を力を尽くして、人が惑わぬようにきわめて厳密に書物を書かれたのです。ご自身で書かれたものは、単に伝え聞いた話とは違つて、第三者の介在が入りませんから、確かな証拠となるからです。

\*

こうした異義はいつの時代も、現代も起こつてきます。そういう時には聖人が力を尽くして書かれたお聖教を第一のよりどころとし、しかもお聖教を正確に学んで聖人のおぼしめしに頭を下げて謙虚に耳を傾けることが大事だと思ひます。自己流の勝手な解釈や、無理なこじつけはつつしまねばなりません。(了)

## 【初めてのインド8】

(一九七〇年十一月)ネパールのカトマンズに着いて、市内を見物。中世にタイムスリップしたような街であった。ヒンズー教的な彫刻が刻まれた3・4階建ての古い建物が道の両脇にぎっしり並んでいる。インドの街に比べて陰気な感じがする。旧の王宮を見学し、午後は近くのスワヤンブナート寺院(目玉寺)に行く。ここは仏教寺院で、チベット人が多数参拝し、摩尼車を回している。仏舎利塔の四方の壁に大きな仏眼が描かれて、四方を見渡しておられる。翌日は早朝3時頃起床し、ヒマラヤなかでもエベレストを見るためにナガールコットという丘に行く。遙か向こうにエベレストの山頂が拝めた。世界一の山を一目見たという満足感はあったが実に寒かった。カトマンズの仏教寺院は密教であるからヒンズー教寺院とよく似ている。ただカトマンズの街はヒンズー色が強く、ネパール仏教はヒンズー教に押されているとの感じがした。2日ほどネパールに滞在した後、インドに再び戻り、宗教都市として有名なベナレスに入ってラマクリシュナミッションに宿泊した。ここには福祉的な医療施設があつて案内してもらった。その後、街の中を散策。きわめて宗教的インド色の濃厚な狭い路地を歩き回る。黄金寺院を見例の火葬場のところに出た。遺体が薪で次々と焼かれている。煙と臭いでおりがらいが、こういう場所に立つとこの世とあの世の境界に立ったような一種独特な感情が湧いてくる。人生とは何か、人間とは何かが直接意識に上る空間である。翌朝、ガンジス河での沐浴風景を見るために早く起きて河に急ぐ。河壁(ガート)には行者とも乞食ともつかぬ人たちがずらりと座っている。ただ日本の乞食とちがって彼らはいつも呪文なり経文なりを唱えている。河岸ではインド各地から参拝に来ているおおぜいのヒンズー教徒たちが熱心に神に祈りながら沐浴をしている。河の水は冷たいが、そんなことは気にもしていない。聖なる水に我が身を

を浸し自らの罪業の浄化を彼らにはかる。ガートから小舟に乗り岸を見て回る。岸辺に歴史を感じさせる寺院が建ち並んでいる。しかし対岸はウソのように何もない平地である。その後、釈尊が最初に説法をされたベナレス郊外にある初転法輪の地、サルナートへ。アシヨカ王の石柱やダメーク塔を参拝。後世に仏教寺院が建てられたその遺跡が多く残っている。サルナート博物館に入るときわめて荘厳で美しい有名な仏陀像が安置されている。平和と安らぎそのものの仏陀像である。台湾系の中国寺院もあつたが、中はひっそりとしてやや活気がなかった。(ところがそれから三十年以上もたった現在台湾仏教は盛んになっている)ベナレスを列車で離れ次に向かったのはアグラである。アグラは名だたるイスラム建造物のタージマハールがある。アグラ駅からタクシーに乗り、タージマハールの門をくぐるとあの写真そのものの光景がどっと目の前に展開して、すばらしい美しさに息をのむ。空は真っ青、その中に白亜の殿堂が浮かび上がり、正面まで緑の芝生と水路がまっすぐに続く。しばらく散策してから近くのアグラ城へいく。オウラングゼデーブ王が造った大きな城で、晩年彼はここに幽閉せられ、窓から彼の愛した王妃が眠るタージマハールを眺めていたのである。次にクリシュナの生誕地といわれるヒンズー教の聖地ブリンダーバンに向かった。ここは同じヒンズー教有数の聖地でも、ベナレスのような喧嘩はなく、非常に静かで浄らかさがただよっていた。ラマクリシュナミッションに泊まる。翌朝早く散策をすると、村のあちこちの家や寺院の中からヒンズー教の勤行である讃歌の音が聞こえてきた。さすがに村全体が宗教的な雰囲気にかまれている。こういう場所は未だかつて訪れたことがない。少し離れたところにインドの大富豪で有名なビルラ財閥が建てた新しいヒンズー寺院があつた。中は、神秘的混沌といった一般のヒンズー寺院に比して明るくカラフルで、神像はたくさん

(続)